

「内科外来診療マニュアル」

市立札幌病院第一内科副医長 吉岡 成人 編集

東京都済生会中央病院・内科

高 木 誠

本書は、臨床研修病院としての伝統と実績を持つ聖路加国際病院の内科ティーチングスタッフによって書かれた、研修医・一般内科医向けの外来診療マニュアルである。

著者らも冒頭に述べているように、現在のわが国における卒後初期臨床研修では、研修の場が病棟や救急外来に偏りがちで、一般外来における診療についての指導がほとんどなされていないという問題がある。確かに病棟では、指導する側にとっても指導される側にとっても診療の間に教育や研修に十分な時間がとれること、入院患者の診療では種々の手技を学ぶ機会が多いことなど、初期研修を行ううえで多くの利点がある。また、医師となったからには、まず救急診療の技術を習得しなければならないことから、一般外来よりも救急外来における研修が優先されるべきであるという事情がある。このため多くの医師は初期研修を終わり、実際に外来診療を担当することになると、次々といろいろな訴えを持って受診する患者を前に戸惑い、

山積みされたカルテを見てため息を漏らすことになる。そして5年から10年もすると、誰に教えられたのでもない、自分なりの外来診療のテクニックを自然に身につける。したがって、外来診療のやり方は医師によって千差万別であり、医師としての優劣や診療の能力の差が現れる理由でもある。

はたして、これでいいのであろうか。初期研修として病棟や救急外来における研修が重視されるのはやむを得ないとしても、少なくともスタンダードな外来診療を行うための入門となるような研修期間が必要なのではない。今、このような考えから多くの臨床研修病院が一般外来における研修の導入を模索している段階にあるように思われる。

そうなれば当然、外来診療を対象とした参考書の出現が望まれ、本書の刊行はまさにタイムリーであると言える。従来の研修医・内科医向けのマニュアルには入院診療や救急診療の場を想定したものが多かった。この点、一般外来に的を絞った本書

は画期的である。基本構成は主訴から診断へ、Common Diseases への対応、健診異常者への対応の3章に分けられており、内科外来で遭遇することが多い種々の状況が取り上げられていて心憎い。また、内容も5人の経験ある指導医が全員で何度もディスカッションをして練り上げただけあって、重要なポイントがまとめられ、とてもプラクティカルに仕上がっている。

外来診療を対象にした類書として、同じ医学書院から、みさと健和病院のスタッフが中心となり書かれた「今日の外来診療」があるが、こちらが外来診療の成書とすると、本書は白衣のポケットに入れて外来に持っていけるハンディー版と言える。研修医だけではなく、ある程度経験を積んだ内科医にとっても外来の合間にちょっと参考にしたくなる本である。

● B6変型 296頁 図25 表49
1995 定価4,120円(税込) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)